

疑問語を並列する助詞「と」について

大山 祐李

An Analysis of the Noun-listing Particle *to* in the Case of Coordinating Interrogatives

OYAMA Yuri

Abstract

This paper aims to analyze the functions of the Japanese noun-listing particle *to* by focusing on cases where *to* coordinates interrogatives such as *nani*, *doko*, *itsu*, *dare* and *dore*. Enumeration of Japanese interrogatives is possible when they are used to determine unknown elements that are to be specified, or to refer to unspecified elements that are predetermined by context. Among the noun-listing particles, such as *to*, *ya*, *mo*, *ka*, *yara*, *toka*, *dano*, *nari* and *ni*, only *to* can be used to list interrogatives in this way.

Teramura (1991) describes the function of *to* as marking an enumeration that lists all the elements that the speaker has thought of. Previous research on *to* focuses on the fact that *to* implies that there are no additional elements other than those listed. However, when *to* coordinates interrogatives in an interrogative sentence (ex: *Doko to doko ni ikimashita ka*. “*Where and where (=which places) did you visit?”), the sentence requires the hearer to answer all the relevant elements in their mind. Therefore, it can be said that the core meaning of *to* is not to indicate that there are no additional elements other than those listed but to indicate that the speaker has listed all the elements that are relevant to the context.

Furthermore, this function of *to* can be described as specifying exactly which elements the speaker refers to. This can be confirmed by the phenomenon where *to* can be used when choosing several elements from multiple options while other noun-listing particles cannot be used in such situations. The reason why *to* is the only particle that can coordinate interrogatives is because its function of specifying all the elements that are in the speaker’s mind fits with the meaning of interrogatives, which seek to determine the specific elements.



目次

1. はじめに
2. 「と」が並列する疑問語の意味特徴
3. 「全部列挙」・「総記」の「と」
4. 疑問語を並列する「と」
5. 「と」の「要素の特定」という機能
6. おわりに

参考文献

のっていますがね、この中からあなたがあの晩
この部屋へ持ちこんだ物はどれとどれですか、
選って下さい」 (海野十三『地獄の使者』)

- (4) 「三つのキーを同時に押すと、強制終了できるっ
ていう、奥の手、ありましたよね。あれ、何と
何でしたっけ？」

(BCCWJ LBq2_00081 岸本葉子
『家もいいけど旅も好き』)

1. はじめに

助詞「と」には、文中で名詞や名詞句を並列して提示する機能がある。次の(1)は、「ピアノ」と「バイオリン」という2つの名詞が、「と」によって並列されている例である。

- (1) 花子は、ピアノとバイオリンを習っている。
(作例)

(1)の下線で示した部分では、名詞「ピアノ」と「バイオリン」はそれぞれが文中で対等に「花子が習っているもの」を表している。このとき、助詞「と」は文中で名詞を並列しているといわれる。

このように名詞や名詞句を並列する機能を有する「と」だが、次のように疑問語も並列することがある。以下の(2)、(3)、(4)は、「と」が疑問文中で疑問語を並列している例である。

- (2) 「鬼十、おまえ、その男たちをかばっているな。
おまえだって、なかまのひとりだろう。だれと
だれが、ここにいたんだ。ここにこなかった
男たちの名まえも、ぜんぶ言うんだ。鬼十、言
わないと、どんなことをしてでも言わせるぞ」
(BCCWJ LBin_00015 前川康男『だんまり鬼十』)²

- (3) 「このテーブルの上に二十七点ばかりの品物が

(2)では「と」によって「だれ」が2つ並列されて
いる。同様に、(3)では「どれ」、(4)では「何」が
2つずつ、「と」によって並列されている。このように、
「と」は文中で同一の疑問語を2つ以上並列すること
がある。

名詞を並列する機能を有する助詞には、「と」のほか
に、「や」「に」「か」「とか」「も」「やら」「だの」「だか」
「なり」などがある(日本語記述文法研究会編 2009a、
中俣 2015)。これらは先行研究では「と」とともに「並
列助詞」と呼ばれているが、「と」以外の「並列助詞」
は、上の(2)、(3)、(4)の「と」と置き換わること
ができない。

- (5) だれ {?や/?に/?か/?とか} だれが、ここに
いたんだ。
- (6) あなたがあ晩この部屋へ持ちこんだ物はどれ
{?や/?に/?か/?とか} どれですか
- (7) あれ、何 {?や/?に/?か/?とか} 何でしたっ
け?

上の(5)、(6)、(7)を見ると、「や」「に」
「か」「とか」は、文中で疑問語「どこ」「どれ」「何」
をそれぞれ重ねて並列すると、不自然である。また、
上記に挙げた以外の「も」「やら」「だの」「だか」
「なり」についても同様に、同一の疑問語を並列する
ことができない。

- (8) だれ {?も/?やら/?だの/?だか/?なり} だれ

{?も/?やら/?だの/?だか/?なり}(が)、ここにいたんだ。

- (9) あなたがああ晩この部屋へ持ちこんだ物はどれ
{?も/?やら/?だの/?だか/?なり}どれ{?も/?
やら/?だの/?だか/?なり}ですか

- (10) あれ、何{?も/?やら/?だの/?だか/?なり}
何{?も/?やら/?だの/?だか/?なり}でしたっ
け?

以上のように見ていくと、文中で同一の疑問語を2つ以上並列することが可能な助詞は、名詞を並列する助詞の中で、「と」のみであるといえる。このことから、この文中で同一の疑問語を並列するという特性は、「と」に特有のものではないかと考えられる。

この疑問語を並列する「と」については、日本語記述文法研究会編(2009a)が「「と」は疑問語を結びつけることもできる。」(p. 115)としているが、その記述は以下の2つの例文を示すにとどまっている。

- (11) 佐藤とだれがやってきたの?

- (12) だれとだれがそこにいたの?

(日本語記述文法研究会編 2009a: 115)

本稿は、この助詞「と」が文中で同一の疑問語を並列するという現象に着目し、現代日本語の「と」の意味について考察することを目的とする。

2. 「と」が並列する疑問語の意味特徴

「と」で並列可能である疑問語は、「なに」「どこ」「いつ」「だれ」「どれ」の5つである。これらは、奥津(1974)では「疑問名詞」(p. 121)、尾上(1983)では「不定語」(p. 404)、寺村(1991)では「不定名詞」(p. 45)、益岡・田窪(1992)では「疑問語」(p. 39)と呼ばれているものであるが、本稿ではこれを統一して疑問語と呼ぶこととする。

疑問語は、用法によって様々な意味をもって用いられるものであるが、そのうち「と」で並列することが

可能な疑問語は、文中で、その疑問語が表す不明な内容を特定しようとする意味を持つものか、あるいはその疑問語の指示対象が文脈上特定されているものに限られる。反対に、このような意味を持たない疑問語は、「と」では並列不可能である。

尾上は、「なに」「どこ」「いつ」「だれ」「どれ」などの疑問語の現代語における用法として、以下の7つの用法を挙げている⁴。

①疑問用法

- (13) 〈驚嘆的受理タイプ〉なに！もう帰ったって？

(尾上 1983:407)

- (14) 〈驚嘆タイプ〉 なんと大きな仏様だなあ！

(尾上 1983:407)

- (15) 〈疑タイプ〉 何をやら どこでやら それがごっちゃになりまして

(尾上 1983:408)

- (16) 〈問タイプ〉 あれは何ですか？

(尾上 1983:408)

- (17) 〈反語タイプ〉 そんなこと誰が信じる(もの)か！

(尾上 1983:408)

②不明確事態指示用法

- (18) 何をやら わからない。(尾上 1983:415)

③汎称用法

- (19) 〈汎称肯定タイプ〉 誰からも愛される好青年

(尾上 1983:419)

④条件一般化用法

- (20) 〈汎称性条件タイプ〉 誰に聞いてもそう言えますよ。(尾上 1983:421)

- (21) 〈逆接条件任意タイプ〉 誰に頼まれようが手伝ってなんかやらないぞ。(尾上 1983:422)

- (22) 〈不特定注釈タイプ〉 どこで修行したを問わず、一定期間話芸を修行した者は……

(尾上 1983:424)

⑤限定拒否用法

(23) いつ とはなく 覚えてしまった。

(尾上 1983:425)

⑥「裏面からの推定」用法

(24) 勉強というものは、誰に頼まれてやるというものではない。

(尾上 1983:426)

⑦「某」項指示用法

(25) 〈引用中「某」項指示タイプ〉 どこへ行った、かしこへ行ったといちいち言い立てる。

(尾上 1983:427)

(26) 〈定対象指示タイプ〉 うちのナニが文句を言いますので……

(尾上 1983:428)

上記の用法の疑問語のうち、「と」で並列可能な疑問語は、5つの用法またはタイプのものに限られる。すなわち、「疑問用法」の「疑タイプ」と「問タイプ」、および「不明確事態指示用法」、それから「「某」項指示用法」の「引用中「某」項指示タイプ」と「定対象指示タイプ」の5つの用法またはタイプにおける疑問語である。以下に、その例を示す。

①疑問用法

(15') 〈疑タイプ〉 何と何を買うやらどことどこで買うやらそれがごっちゃになりました(16') 〈問タイプ〉 (あれは) 何と何ですか？

②不明確事態指示用法

(18') 何と何を買うやらわからない。

⑦「某」項指示用法

(25') 〈引用中「某」項指示タイプ〉 どことどこへ行った、かしこへ行ったといちいち言い立てる。(26') 〈定対象指示タイプ〉 うちのナニとナニが文句を言いますので……

上記のような「と」で並列可能な疑問語は、その疑

問語が表す不明な内容を特定しようとする意味を持つものか、もしくはその疑問語の指示対象が文脈上特定されているものとして説明可能なものである。

まず、「疑問用法」の「疑タイプ」と「問タイプ」に関して尾上は、「不定部分の特定を求める」(p. 410) 疑問表現であると述べている。このうち、「疑タイプ」の疑問語については、話者自らの内部でその不定部分の特定を求める用法であると説明している。また、「問タイプ」の疑問語については、疑問を投げかける相手に対して不定部分の特定を求める用法であるとしている。したがって、「疑タイプ」と「問タイプ」の用法の疑問語は、不明部分に該当する内容を特定しようとする意味特徴を持っているということである。

続く「不明確事態指示用法」については、「未定対象指示型」の用法に分類されている。この「未定対象指示型」の用法は不定の物事や、不定の事態そのものを対象的に指示する用法とされ、尾上は、この用法はもともと「何を買うやら、それがわからない」という「疑問用法」の「疑タイプ」の表現から「それが」が消え、「何を買うやら」の部分が「わからない」の主語のように了解されるようになったものであるとしている。この尾上の説明をみると、この「不明確事態指示用法」の疑問語は、本来的には「疑問用法」の「疑タイプ」と同様に、その不明な内容の特定を求めるはたらきを持つものだといえる。このことを踏まえると、「不明確事態指示用法」における疑問語も、その不定の内容を特定しようとする意味を有するものであるといえる。

上記の2用法における疑問語は不明な内容の特定を目指す意味を持つものであるが、同じく「と」で並列可能な「「某」項指示用法」の疑問語については、上記の2用法のものとは異なり、不明な指示内容の特定を目指すのではなく、疑問語が「特定を目指さないという姿勢をもって空欄を対象的に指示する」(p. 427) 用法であるとされている。

この「「某」項指示用法」のうち、「どこへ行った、かしこへ行ったといちいち言い立てる。」のような疑問語は、「引用中「某」項指示タイプ」に分類されており、「その内容が不明のままだでも人なり場所なりある対象

を指示していることがわかれば表現全体の意味は確定し、何ら差しつかえない」(p. 427)ものとされている。つまり、不定部分の内容について詳細な特定は要求しないが、指示対象が人であるとか、場所であるといったレベルで対象を指示しているもので、文脈上十分に意味が通じる程度に指示対象が特定されているものであるといえる。

同じく「〔某〕項指示用法」に分類されている疑問語のうち、「定対象指示タイプ」の疑問語について尾上は、「言う必要もないほどわかりきっている対象（名詞項目あるいは動作内容）や、詳しく説明すれば繁雑になるが言わなくても大略は了解できるというような事態内容を「ナニ」で指示する用法である。」(p. 428)と説明している。例えば(26)「うちのナニが文句を言いますので……」と言え、たいていの場合は「ナニ」は「話者の配偶者」とであると了解される。したがって、この「定対象指示タイプ」の疑問語も、その指示内容が文脈上十分に特定されているものであるといえる。

ところで、この(26)の「ナニ」については、(26')のように「うちのナニとナニ」とすると、文脈上「配偶者」以外の指示対象が想定しにくい、多少の不自然さが否定できない。しかし、例えば「例のナニとナニの件は追ってご連絡しますので……」(作例)のような、話し手と聞き手の間で了解されている何らかの特定の事態内容を指しているとして理解される「ナニ」の場合は、このように「と」で並列しても違和感はないだろう。

以上をまとめると、「と」で並列可能な疑問語は、その疑問語が表す不明な内容の特定を目指す意味を持つものか、もしくは、その疑問語が文脈上ある特定の対象を指示する意味を有するものであるといえる。

一方、上記で挙げた用法以外の用法における疑問語は、以下のように「と」で並列すると不自然になる。

①疑問用法

(13') 〈驚嘆的受理タイプ〉 ? なにとなに ! もう帰ったって ?

(14') 〈驚嘆タイプ〉 ? なんとなん (と) と大

きな仏様だなあ !

(17') 〈反語タイプ〉 ? そんなこと誰と誰が信じる (もの) か !

③汎称用法

(19') 〈汎称肯定タイプ〉 ? 誰と誰からも愛される好青年

④条件一般化用法

(20') 〈汎称性条件タイプ〉 ? 誰と誰に聞いてもそう言ってますよ。

(21') 〈逆接条件任意タイプ〉 ? 誰と誰に頼まれようが手伝ってなんかやらないぞ。

(22') 〈不限定注釈タイプ〉 ? どことどこで修行したを問わず、一定期間話芸を修行した者は……

⑤限定拒否用法

(23') ? いつといつとはなく覚えてしまった。

⑥「裏面からの推定」用法

(24') ? 勉強というものは、誰と誰に頼まれてやるというものではない。

これらの「と」で並列すると不自然な疑問語には、「と」で並列可能な疑問語と異なり、積極的に不明な内容の特定を目指す意味が認められず、また文脈上特定された対象を指示する意味もない。

まず「疑問用法」の「驚嘆的受理タイプ」(例(13)「なに ! もう帰ったって ?」)について尾上は、「不明な対象を明確化しようという姿勢はあくまで持ちながら、当面は明確化できないものとして」(p. 409)、不明な内容をひとまず空欄として表すために疑問語を用いるものであるとしており、「その内容の明確化は後続文に委ねる」(p. 409)のものであると説明している。また、「なんと大きな仏様だなあ !」のような「驚嘆タイプ」については、驚嘆の対象となる事態のある部分が「特定把握しがたいほどである」(p. 409)ということを疑問語の使用によって表現するものであるとしている。し

たがって、「驚嘆的受理タイプ」と「驚嘆タイプ」の用法における疑問語は、不明な内容の特定を目指そうとする話者の態度から生じているものではあるが、その疑問語自体は主に話者の感動を表すために用いられているものであり、不定の内容を積極的に特定しようとすることに意味の中心があるものではない。また、文脈上特定された対象を指示するものでもない。

また、上述の2タイプと同じく「疑問用法」に分類されている「反語タイプ」(例(17)「そんなこと誰が信じる(もの)か!」)については、不定の部分について特定するよう相手に要求する形をとるものであるが、実際は疑問ではなく「その不定項を埋めるようなものは何もない」(p. 410)ということを主張するものであるとされている。つまり、「反語タイプ」の用法の疑問語は、積極的に不定の部分特定しようとするものではなく、むしろその不定部分に該当する要素はないということを主張することに主眼をおいた表現だということである。したがって、この「反語タイプ」の疑問語も、不定部分の内容を特定しようとすることに意味の中心があるものではなく、特定の対象を指示する意味も持たない。

次に、「汎称用法」については、「「x項に何を代入してもその事態が成立する」という積極的な意味あい

で特定不要を主張する」(p. 416)ものと説明されており、これに分類されている「汎称肯定タイプ」の疑問語も、指示内容の特定は不要であるということを主張する意味を持つものである。例(19)「誰からも愛される好青年」は、この「誰」にどんな要素が代入されても、その好青年が「愛される」という事態が成立するということをもって、「みんなから愛される好青年である」ということを表現するものである。このように、「汎称用法」の疑問語は指示内容の特定を目指す意味を持たない。また、この用法の疑問語は指示対象の特定が不要であることを主張するものであるため、特定の対象を指示する意味も持たない。

また、「条件一般化用法」(例(20)「誰に聞いてもそう言ってますよ。」、例(21)「誰に頼まれようが手伝ってなんかやらないぞ。」、例(22)「どこで修行し

たを問わず、一定期間話芸を修行した者は……」)の疑問語について尾上は、文中のある条件的部分における不定の部分にどのような要素が代入されても、結論が変わらないことを示す用法であるとしている。尾上はこの用法を「事態の成立にとって不定項を特定することの無意味さを主張する」(p. 416)タイプの用法であるとして、「特定不要型」の用法に分類している。この尾上の説明を見ると、この用法における疑問語も、不明な内容の特定を目指す意味を持たず、特定の対象を指示する意味も持たないことがわかる。

さらに、尾上によると、「限定拒否用法」は事態中のある要素について、その内容を特定し限定すること拒否することによって、不透明性を主張するものだというのである。例(23)「いつとはなく覚えてしまった。」という文は、「いつ」によって表される不定の内容が特定できないということを用いることによって、「いつのまにか覚えた」ということを表現するものである。したがって、この「限定拒否用法」の疑問語は、不定部分に該当する要素を特定しようとするものでも、文脈上特定された対象を指示するものでもないといえる。

また「裏面からの推定」用法については、その不定の内容を特定しようがないということを主張するものであるとされている。(24)「勉強というものは、誰に頼まれてやるというものではない。」という文は、「誰」に該当する人物が存在せず、その不明な内容が特定不可であるということをもって、「勉強は他人に頼まれてするものではなく、自分でしようとするものだ」ということを表現するものである。したがって、この「裏面からの推定」用法の疑問語も、不定部分に該当する要素の特定を目指すものではないといえる。また、内容の特定が不可能であることを表すものなのだから、特定の指示対象も持たない。

以上のように、助詞「と」によって並列できない疑問語は、不明な内容を不明なままに表すものか、不明な内容を特定する必要がない、あるいは特定できないということを主張する意味をもって用いられているものである。このような用法の疑問語は、文中において

その疑問語が表す不明な内容の特定を目指す意味を持たず、また、文脈上特定された対象を指示する意味も持たない。

以上をまとめると、「と」によって並列可能な疑問語は、その疑問語が表す不明な内容に該当する要素を特定しようとする意味をもつものか、あるいはその疑問語の指示対象が文脈上特定されているものであるといえる。

3. 「全部列挙」・「総記」の「と」

前節では「と」で並列可能な疑問語の意味特徴について述べたが、このような「なに」「だれ」のような疑問語を並列する機能は、「と」以外の名詞を並列する助詞にはないものである。このことから、疑問語を並列するという機能は、「と」に特有のものであると考えられる。では、疑問語を並列する「と」は、文中でどのような意味機能を果たしているのだろうか。

先行研究では疑問語を並列する「と」はほとんど取り上げられていないが、名詞を並列する「と」の意味について記述を行なっている研究は、寺村（1991）、益岡・田窪（1992）、森田（2007）、日本語記述文法研究会編（2009a）、中俣（2015）などがある。この3節では、まずこれらの先行研究を検討し、名詞を並列する「と」の意味についてまとめる。

寺村（1991）は、名詞を並列する「と」の意味を「全部列挙」と呼び、次のように説明している。

「 N_1 ト N_2 ト N_3 (ト N_4 ト…) (ト)」は、一般に、そのひとまとまりがある資格をもって、その文の構成要素として他の語と関係をもつ、その資格をもつものを全部あげる場合に使われる。たとえば、
(2) このキャンパスには工学部と医学部と付属病院と大学本部があります。

というとき、「このキャンパスにあるもの（この場合は主要な大学構成体）」という「条件」でくくられたセットの個々のもの（「メンバー」）が全部そこにあげられていることになる。

（中略）

この「すべて」というのは、話し手がその発話にあたって頭においている或るセットのメンバーのすべて、という意味である。客観的な事実(?)とはかならずしも一致しない。

（寺村 1991:199 下線は引用者

引用中の例文番号は引用元のまま）

この寺村の説明をまとめると、「と」は、話者がその発話にあたって頭の中においている「セット」のメンバーが、文中に全て列挙されていることを意味するということである。

益岡・田窪（1992）の「と」に関する説明も、この寺村の「全部列挙」に共通する部分がある。益岡・田窪は「と」を「総記」の並列表現に分類し、「該当する要素をすべて述べあげる並列表現である。普通はそれ以外の要素はないことを含意する。」(p. 161)としている。

森田（2007）の説明も寺村、益岡・田窪と重なる部分があり、「と」は列挙された要素が「今問題とする事項に該当するすべてであり、一つのまとまりをなす。」(p. 281)としている。その上で、「「箸と茶碗と皿とを持って来い」と言えば、それら三つをそろえて持って行くことであり、どれか一つを欠いては意味がない。」(p. 281)と説明している。つまり「と」は、列挙された要素がすべてそろって、1つのまとまりとなっていることを示すということである。

日本語記述文法研究会編（2009a）でも、「と」は「全部列挙型」の「並列助詞」として分類されており、「何らかの共通性をもった同じグループに属する要素をすべて列挙していくものである。」(p. 114)とされ、並列された要素について、「該当する要素がそれだけである」(p. 115)ということを示すとされている。

以上のように、名詞を並列する助詞「と」は、ある集合に属するすべての要素が列挙されていることを示す意味を持つと説明されてきた。

しかしこれらの記述に対して中俣（2015）は、「と」の「全部列挙」という意味は語用論的な推意であると

指摘している。中俣は、寺村の「全部列挙」という概念を「挙げられた要素の他に要素が何もない」ということを表すとした上で、これをキャンセル可能な推意 (implicature) であると指摘している (p. 15)。

この推意というのは語用論で用いられる概念で、文脈や社会通念から導き出されるような、言語形式では表現されない発話の意味のことを指す (山岡・牧原・小野 2010:48)。以下にその例を示す。

(27) A: Is that new Italian restaurant good?

B: The chef is Italian.

(28) The restaurant is good. (東森・吉村 2003:52)

(27A) の質問に対する (27B) の発話は、「(あのイタリアンレストランの) シェフはイタリア人である」という字義通りの意味のほかに、(28) のように「あのレストランの料理はおいしい」という意味に解釈することができる。これは、聞き手が「シェフがイタリア人なのであれば、その店で出されるイタリア料理はおいしいだろう」と推論をはたらかせるためである。この (28) で示されるような、文脈によって決定され、言語形式では明示されない文の意味が、文の推意である。

しかし、この (27) の解釈は、以下の (27'B) のように、後続の発話によって取り消されることがある。

(27') A: Is that new Italian restaurant good?

B: The chef is Italian. But the food is not so good.

(下線部は筆者が追加)

(27'B) では、“The chef is Italian.” という発話の持つ「あのレストランの料理は美味しい」という解釈が、続く “But the food is not so good.” によって取り消されているが、特に矛盾は生じていない。このように、推意は後続の発話によって矛盾なく却下可能であるという特徴を持つ。

中俣はこの推意という概念を用いて、「と」の「他には何もない」という意味は、次の (29) の例のよう

に却下できるため、「全部列挙」というのは「語用的な推意」(p. 49) であるとしている。

(29) 昨日は、ビールとワインを飲んだ。他にもカクテルを少し飲んだ。 (中俣 2015:49)

中俣は (29) について、「ビールとワインを飲んだ」という文は、「ビールとワイン以外は何も飲まなかった」ことを含意するが、この「他には何も飲まなかった」という意味は、「他にもカクテルを少し飲んだ」によって却下しても特に矛盾は生じないと説明している。そして、このように「と」の「他には何もない」という意味は後続の文によって却下可能であるために、「全部列挙」というのは推意であると説明している。

しかし先述したように、寺村の「全部列挙」という概念は、現実存在する要素が挙げられたものですべてだということを意味するのではなく、話者が発話時点において頭に思い浮かべている要素が、それで全部だということを示すものである。この寺村の「全部列挙」の概念を正しく当てはめると、この (29) の「昨日は、ビールとワインを飲んだ。」という文の「ビールとワイン」という並列部分は、その発話時点で話者が頭においている「昨日飲んだもの」というセットのメンバーは、ひとまず「ビール」と「ワイン」の2つですべてであるということを示しているということである。そしてこの、その発話の瞬間に話者が頭の中においているセットのメンバーは「ビール」と「ワイン」ですべてであるという意味は、たとえその後「他にもカクテルを少し飲んだ」と付け加えたとしても、却下されるものではないと思われる。なぜならば、後続の「他にもカクテルを少し飲んだ。」という発話は、「ビールとワインを飲んだ。」という発話時点にまで遡って、その時点で話者が「ビール」と「ワイン」と「カクテル」の3者を頭においていたことを表すものではないからである。

「他にもカクテルを少し飲んだ」の「他にも」という表現は、先に提示した要素以外に、さらに該当する要素をそこに追加することを表すものである。した

がってここでは、先に述べられた「ビール」と「ワイン」以外の要素として、さらに「カクテル」が「他にも」によって追加されているということになる。「他にも」はこのように既出の要素以外の該当要素を後から追加するものであるため、「他にもカクテルを少し飲んだ。」という文は、「ビールとワインを飲んだ。」と発話した時点では、話者が「カクテル」については頭においていなかったということを取り消さない。むしろ、「ビールとワインを飲んだ」という文の発話時点では、話者の頭の中にある「昨日飲んだもの」というセットには「ビール」と「ワイン」だけがメンバーとして存在しており、「カクテル」についてはその限りではなかったために、後続の文では「カクテル」が「他にも」によって追加されていると考えるほうが自然である。

このように考えると、「ビールとワイン」が持つ「ビール」と「ワイン」ですべてであるという意味は、「他にもカクテルを少し飲んだ。」という文によってキャンセルされているとはいえず、むしろ「ビールとワイン」が「全部列挙」であるからこそ、このように「他にも」によって「カクテル」が追加されているのだといえる。

以上を踏まえると、「ビールとワイン」という並列表現の、発話にあたって話者が頭においている「昨日飲んだもの」というセットのメンバーは、「ビール」と「ワイン」ですべてであるという意味は、非明示的な推意ではなく、この「ビールとワイン」という言語形式そのものの持つ本質的な意味であると考えられる。そして、この「ビールとワイン」が表す「ビール」と「ワイン」ですべてであるという意味は、「ビール」と「ワイン」を並列する「と」によって生まれているものである。したがって、この「と」の「列挙された要素ですべてである」という「全部列挙」の意味は、推意ではなく、「と」の本質的な意味であるといえる。

4. 疑問語を並列する「と」

ここまで見てきたように、名詞を並列する「と」には、話者が発話にあたって頭においているセットのメ

ンバーがすべて列挙されていることを示す「全部列挙」の意味がある。この「全部列挙」という「と」の意味は、疑問語を並列する「と」にも当てはまるのだろうか。

疑問語を並列する「と」には、話者にとって集合に属するメンバーの全数が既知である場合に用いられているものと、未知である場合に用いられているものがある。次の(30)、(31)は、集合のメンバーの全数が話者にとって既知である文脈に現れている疑問語を並列する「と」の例である。

(30)「伝馬町の牢拔けは二人挙げられました」

「誰と誰だ」

「二本松の惣吉と川下村の松之助です」

(岡本綺堂『半七捕物帳』)

(31)ズバリ関東エリアのプールで、混雑度の高いプール TOP3 を挙げるとすると、それはどこと、どこと、どこですか。

(BCCWJ OC13_03481「Yahoo! 知恵袋」)

(30)の例では、「伝馬町の牢拔け」というセットには、全部で2人のメンバーが属しているということが明示されている。(31)の例でも、「混雑度の高いプール TOP3」というセットにおいて話者が想定している要素の数は、一般知識に照らして考えれば全部で3つである。

(30)では「伝馬町の牢拔けとして挙げられた二人」について、話者はその2人のメンバーを具体的に特定しようと「誰と誰だ」と問いかけている。このとき、話者の頭の中には「伝馬町の牢拔け」の「二人」に該当するメンバーが全部で2人いると想定されており、この「誰と誰」の1つ目の「誰」と2つ目の「誰」はそれぞれ、その2人のうちのそれぞれ1人ずつに、1つずつ対応していると解釈される。このように考えると、この「誰と誰」の「と」は、集合のすべての要素を列挙する「全部列挙」の機能を果たしているといえる。

(31)の例でも、話者は頭の中にある「混雑度の高

いプール TOP3」というセットに属する3つの要素について、具体的にどのプールが該当するのかを問うために、「どこと、どこと、どこですか。」のように、疑問語「どこ」を3つ「と」で並列して問うていると解釈される。このとき、1つ目の「どこ」と2つ目の「どこ」と3つ目の「どこ」はそれぞれ、3つある「混雑度の高いプール TOP3」のうちの1位、2位、3位のプールに1つずつ対応していると考えられる。したがってこの(31)の「どこと、どこと、どこ」の「と」も、すべての要素を列挙する「全部列挙」の「と」であると考えられる。

このように、集合の全数が明示されている文脈において、疑問語をその集合の全数と同じだけ並列する「と」は、「全部列挙」として説明することができる。

しかし次の(32)、(33)、(34)では、集合の全数が3以上のある数であると明示されているが、「と」は疑問語を2つしか並列していない。

- (32)「そして、お雪ちゃんは誰と温泉へ行きました」
 「誰とだか……」
 「お前、知らないの？」
 「ええ。だけでも、一人で行ったんじゃないんだよ」
 「一人じゃないの、幾人で？」
 「三人連れで……」
 「その三人は、誰と誰？」
 お銀様の追窮が、やっぱり急になってゆくので、茂太郎の困惑が重なるばかりです。
 「それは、わかっているにはわかっているが、弁信さんが、いうなといったからいわれない」
 「そう……」

お銀様も、それ以上は押せなくなりました。

(中里介山『大菩薩峠』)

- (33)そうすると、今の御答弁だと、要するに両方半々のウエートをかけたというように理解していいと思うのですが、今のお話の中でもって各省間で協議したとありますが、六省庁というのは具体的にはどことどこを言うのですか。

(BCCWJ OM31_00002「国会会議録」)

- (34)「ねえ、玉村君、きみ、ほんとうに玉村君だろうね。」

松井君がみょうなことをいいました。

「なにをいってるんだ。ぼくは玉村だよ。どうして、そんなことをきくんだい。」

銀一君は、おこったような顔をしました。

「きみ、それじゃあ、少年探偵団のバッジをもってるかい？」

「きょうはもってないよ。うちにあるよ。」

(中略)

「じゃあ、七つ道具は？」

「えっ、七つ道具って？」

少年探偵団の七つ道具は、①B・Dバッジ ②万年筆型の懐中電灯 ③呼び子の笛 ④虫めがね ⑤小型望遠鏡 ⑥磁石 ⑦手帳と鉛筆です。

「それももってないんだね。」

「うん。きょうはもってないよ。」

「じゃあ、なにとなににだかいってごらん。」

玉村君は、きょうには答えられないで、しばらく考えていましたが、やがて、どもりながら、こんなことをいうのです。

「B・Dバッジ、それから懐中電灯、えーと、それから、オモチャのピストル、とびだしナイフ、えーとそれから……。」

そこで、いきづまってしまいました。玉村君は、七つ道具を知らないのです。

(江戸川乱歩『超人ニコラ』)

(32)では、話者は集合の全体の人数が「三人」だと分かっており、したがって話者の頭の中の集合には3人の人物が想定されているはずである。しかしここで話者は、「その三人は、誰と誰？」のように、疑問語「誰」を「と」で2つだけ並列し、「その三人」に該当する人物を問うている。(33)でも同様に、「六省庁」にまとめられている省庁は全部で6つあるはずだが、話者は「どこ」を2つだけ「と」で並列し、該当

する省庁をたずねている。(34)の例でも、話者が想定する「七つ道具」という集合には当然7つの要素が存在していると思われるが、話者は「何」を2つだけ並列して、「七つ道具」の内容について問いかけている。

一見するとこれらの「と」は、集合の一部だけを取り出しており、「全部列挙」とは言えないのではないかと思われる。しかし、このような「と」についても、集合のすべてのメンバーを挙げる「全部列挙」の機能を果たしていると考えられる。

(32)、(33)、(34)の疑問文から読み取れる話者の問いの意図は、集合に属するすべての要素について、それらが何であるのかを特定しようとしているということである。(32)の「その三人は、誰と誰?」というのは、「三人」のうち、「誰」に対応する1人の人物と、もう1つの「誰」に対応するもう1人の人物の2人だけを特定しようとしているとは考えにくく、「誰と誰」と聞いて、「その三人」に該当する人物を3者すべて特定しようとしていると解釈するのが自然である。(33)の「六省庁というのは具体的にはどこどこを言うのですか。」についても、「六省庁」にまとめられた6つの省庁の内訳を知ろうとしていると解釈する方が自然であろう。(34)は、「玉村君」が本人であるかどうかを確認するために、「玉村君」が知っているはずの「七つ道具」の内容を言わせようとする場面である。このとき、この「七つ道具は?」「なにとなにだかいてごらん。」というのも、「七つ道具」というセットに属する要素のうち、「何」に対応する1つの要素と、もう1つの「何」に対応する1つの要素の合計2つだけを問うているのではなく、7つの要素をすべて答えさせようとしていると文脈から読み取れる。

以上のように、話者が集合の全数を明確に想定している文脈では、文中で「と」で並列されている疑問語の数がその集合の全数よりも少ない場合であっても、「疑問語+と+疑問語(+と…)」という表現には、その集合に属するすべての要素について特定しようとする意味があると考えられる。そしてこの全ての要素の特定を目指す意味は、疑問語を並列している「と」に

よって生まれているものと考えられる。なぜならば、疑問語それ自体は該当要素をすべて特定しようとする意味を持っているわけではないからである。

次の(35)、(36)の例に見られるように、単独の疑問語によって疑問が投げかけられた場合、仮に聞き手の頭の中にその指示対象となる要素が複数あったとしても、聞き手はそのうちの代表的な1つだけを答えてもよい。

(35)「使には、誰が見える」

「御用人様で」

「ほかには」

「御浪人なすった堀部様や、奥田様、そのほかのお方も、時々、お立ち寄りなさいます」

(吉川英治『新編忠臣蔵』)

(36)「若い奥さんは毎日何をしているかい」

「針仕事を……」

「それから」

「三味を弾きます」

(夏目漱石『草枕』)

(35)において、「使には、誰が見える」という質問を受けた人物は、「使に見える人」に該当する人物を複数知っているようであるが、疑問語「誰」が単独で用いられた問いかけに対して、まず「御用人様」と1人の人物を挙げている。(36)でも、質問の受け手は「若い奥さんが毎日していること」を少なくとも2つ知っているが、単独の「何」によってその具体的な事柄を問われたとき、最初に「針仕事」と1つだけを答えている。これらの場合、質問を受けた人物が質問に対する回答を発した時点において、答えたもの1つしか頭に浮かんでいなかったのか、それとも複数の要素を思い浮かべていたにもかかわらずそのうちの1つだけを答えたのか、どちらなのかはわからない。しかし、質問を受けた人物が複数の該当要素を知っていたことは文脈上明らかである。したがって、発話の時点で質問を受けた人物の頭の中にはそれら複数の要素が頭に浮かんでいて、そのうちの1つだけを答えた可能性がな

いとは言い切れない。

このように考えると、疑問文中で疑問語が単独で用いられた場合は、質問の受け手はたとえ複数の該当要素を頭の中に浮かべていても、それらをすべて答える義務はなく、該当する要素群から代表的なものを1つだけ答えるのでもよいといえる。したがって、疑問語自体には、質問の相手に不明部分に該当するすべての要素について答えさせようとする意味はないものと考えられる。

これに対して、先に見たように、この疑問語が疑問文中で「と」によって2つ以上重ねられると、質問の受け手の思いつく限りのすべての該当要素について問う意味が生まれる。前述のように、疑問語自体にはこのすべての該当要素の特定を目指すという意味はないのだから、この「すべて」という意味は、「と」の、該当要素をすべて挙げるという「全部列挙」の意味から生まれていると考えられる。

以上から、(32)、(33)、(34)の例のような、集合に属するメンバーの全数が話者に了解されている文脈において、その全数より少ない数の疑問語を並列する「と」についても、質問の受け手の頭の中にあるすべての該当要素について問う作用を持つという点において、「全部列挙」の意味があると説明できる。

さらにこの「全部列挙」という意味は、集合に属する要素の全数が話者にとって不明である文脈において、疑問語を並列する「と」にも当てはまるものと思われる。次の(37)、(38)の例は、集合のメンバーの全数が話者にとって不明である文脈で、「と」が疑問語を2つだけ並列している例である。

- (37)「なるほど。すると…、エジプトとサウジアラビアの、どこと、どこを案内されたんです？」
 「どこと、どこって、全部で十二カ所よ」
 「十二カ所も？ その具体的な地名は？」
 「地名ですって？ 砂漠は海と同じなのよ。東京みたいに電柱が立っていて、所番地が表示してあるわけじゃないわ。見渡す限り、砂の海、海、海よ」

(BCCWJ LBp9_00162 佐竹一彦『警視庁公安部』)

- (38)「光丸さんが逃げて、博多に隠れるということ、お前に連絡があったの？」
 「わたしたちが、逃がしましたのです」
 「わたしたち？……たち、というのは？」
 「みんなで、寄ってたかって、逃がしたものですから……」
 「みんな？ お前一人ではなかったんじゃないね」
 「はあ」
 「誰と誰？ 話してごらん」
 勝則は、ちょっと、下唇を噛んで、思案していたが、思いきったように、顔をあげた。
 洗いざらい、告白した。(火野葦平『花と龍』)

(37)と(38)の下線で示した部分では、疑問語が2つ、「と」によって並列されている。(37)の「どこと、どこを案内されたんです？」という疑問文については、この疑問を問いかけたあとに、話者が「十二カ所も？」と驚きながら聞き返していることから、「どこと、どこ」という疑問の発話時点では、話者はこの「案内された」場所が全部で何か所あるのか、その全数を特に想定していたわけではないと思われる。(38)の例についても同様に、ここで「誰と誰？」と問うている人物は、「逃がした」に表される行為を行なった人物が複数存在することはわかっているものの、そのメンバーが全部で何人なのかはわかっていない。このように、(37)と(38)の例では、発話時点で話者は集合の全数を特に想定していないにもかかわらず、疑問語を2つだけ「全部列挙」の「と」で並列し、該当要素を問うている。

(37)の「どこと、どこ」という並列表現について見てみると、1つ目の「どこ」の指示対象となる1つの場所と、2つ目の「どこ」の指示対象となる1つの場所の合計2か所が、話者の頭の中にある「案内された場所」というセットのメンバーのすべてだということを表しているとは解釈しにくい。この「どこと、どこ」は、具体的な数は特に表さないままに、単に「案内された場所」に該当するのが1か所だけではなく、複数

あることを前提として問うていることを表しているものと解釈される。そしてこの「どこと、どこ」は、「案内された場所」に該当する複数の場所を、思いつく限りすべて述べ挙げよ、と質問の受け手に働きかけていると解釈されるのではないだろうか。

(38)の「誰と誰」についても同様に、これは1つ目の「誰」に該当する1人の人物と、2つ目の「誰」に該当する1人の人物の合計2人について、特定しようとするものではない。ここでの「誰と誰?」というのも、全体の人数は不明であるが、質問の受け手が頭の中に思い浮かべている複数のメンバーを、すべて特定しようとしているものだとして解釈するのが自然である。

このように、話者が集合の全数を特に想定していない場合でも、疑問文中の「疑問語 + と + 疑問語 (+ と …)」という並列表現には、質問の受け手に、頭の中においているすべての要素を挙げることを要求する意味が生まれるものと考えられる。そして先述したように、疑問語自体にはこのすべての該当要素を特定しようとする意味はないため、この思いつく該当要素すべてを列挙するよう相手に求める作用は、疑問語を並列する「と」から発生しているものであると考えられる。したがって、話者が集合の全数を特に明確に想定していない場合でも、疑問文中で疑問語を並列する「と」は、質問の受け手が頭の中においているすべての該当要素を述べ挙げることを求めることから、「全部列挙」の意味があるといえる。

以上をまとめると、疑問語を並列する「と」には、話者が集合の全数を明確に想定しているか否か、またその全数が文中に列挙された疑問語の数と一致するか否かにかかわらず、質問の受け手に、その疑問語の指示対象に該当する要素を、思いつく限り全て述べ挙げることを求める意味があることがわかった。このことから、「と」は疑問語を並列する場合でも、該当要素をすべて特定しようとする点において、名詞を並列する場合と同じように「全部列挙」の意味があると説明することが可能である。

5. 「と」の「要素の特定」という機能

ここまでで、名詞を列挙する場合でも疑問語を列挙する場合でも、「と」には該当要素をすべて列挙するという「全部列挙」の意味があることを述べてきた。それでは、この「と」の「全部列挙」という意味と、「と」だけが疑問語を並列するという現象とは、どのようなかわりがあるのだろうか。

2節で述べたように、「と」で並列可能な疑問語は、文中で、その不明な部分に該当する要素の特定を目指す意味を有するものか、文脈上その指示対象が特定されているものに限られる。また、「と」は、指示内容の特定を目指さず、不明部分を不明なままにしておくタイプの用法の疑問語は並列することができない。このことから、「と」で並列される疑問語は、必ず指示内容を特定しようとするものか、もしくはその指示内容が文脈上特定されているものでなければならないといえる。

これと同様に、「と」の「全部列挙」という意味も、指示内容を特定する意味をもって要素を文中に提示する機能であると考えられないだろうか。

複数の要素が「N と N (と) …」(N=名詞)の形で文中に列挙されたとき、「N と N (と) …」という並列部分は、発話時点で話者の頭の中にある要素は、挙げられたものですべてであるという意味を表す。この「挙げられたものですべてである」というのは、すなわち、話者がその発話にあたって命題に該当する要素として頭においているものは、そこに挙げられたもの以上でも以下でもなく、これだけであると示すということである。つまり「と」というのは、発話時点で話者の頭の中において命題に該当する要素について、それ以上でも以下でもなく「まさにこれである」と断定して文中に列挙する機能を持っているものであるといえる。このように考えると、「と」の「全部列挙」というのはすなわち、話者がその発話時点で命題の該当要素として頭においているものは「まさにこれである」と特定する意味をもって、文中に列挙することだと考えられる。なお、ここでいう特定というのは、「ほか

のものではなく、これである」といったぐあいに、話者の頭の中で命題に該当するのがその名詞（あるいは名詞句）で表される事柄であるということを、断定的に指定して文中に示すという意味である⁵。

このことを示す例として次の(39)が挙げられる。「と」は次のように、提示された選択肢の中から、該当する要素を複数選び出して列挙する際に用いることが可能である。

(39) (レストランでウェ이터と客が話している場面)

A コースのデザートは、チーズケーキ、アップルパイ、プリン、ババロアの中から何種類でもお選びいただけますが、いかがなさいますか。

B ジャあ、チーズケーキとババロアをお願いします。(作例)

(39B)は、(39A)で提示された4種類のデザートの中から、「チーズケーキ」と「ババロア」の2つを選び出し、「と」で列挙しているものである。このとき、この「と」は、「話者が選んだデザート」というセットに含まれる要素は「チーズケーキ」と「ババロア」の2つであると厳密に特定して示しており、「チーズケーキ」と「ババロア」以外の他のデザートが選択される可能性をひとまず排除している。このように、「と」には該当する要素を厳密に特定する機能があり、この機能が従来の先行研究では「全部列挙」と説明されてきたといえる。

この「と」の要素の特定という機能が「と」に特徴的であることは、名詞を並列する他の助詞と比較すると明らかである。

例えば名詞を並列する助詞「や」は、「該当するものの中の代表的なものを例として述べる並列表現である。したがって、他にもまだ要素があることが含意される。」(益岡・田窪 1992:162)とされるものであるが、仮に上記の(39A)の質問に対して、「と」の代わりに「や」を用いて答えた場合、次の(40)のようになる。

(40)? ジャあ、チーズケーキやババロアをお願いします。

(39A)の問いかけに対して(40)のように「チーズケーキやババロア」とすると、列挙されていない選択肢の「アップルパイ」と「プリン」が、「話者の選択したデザート」というセットに含まれている可能性が排除されない。(40)が(39A)の質問に対する答えとして不自然なのは、このように「や」が「と」と異なり、命題に該当する要素を厳密に特定する機能を持たないためである。

さらにこのことは、中俣が「排他的推意なし」⁶としている「や」以外の助詞「も」「とか」「やら」「だの」「だか」「なり」においても同様である。

(41) ジャあ、チーズケーキ { ? も / ? とか / ? やら / ? だの / ? だか / ? なり } ババロア { ? も / ? とか / ? やら / ? だの / ? だか / ? なり } (を) お願いします。

(41)を見ると、「も」「とか」「やら」「だの」「だか」「なり」のいずれを用いても、(39A)の質問に対する答えとしては不自然になる。これは、「や」と同様に、「も」「とか」「やら」「だの」「だか」「なり」が、該当要素を特定して示すという意味を持たないためである。

また、この要素を特定するという意味は、中俣が「排他的推意あり」としている助詞「か」と「に」にも見られないものである。次の(42)は、(39A)の質問に対して、「か」もしくは「に」を用いて答えているものである。

(42)a? ジャあ、チーズケーキかババロアをお願いします。

b? ジャあ、チーズケーキにババロアをお願いします。

(42a)の「チーズケーキかババロア」は、「チーズ

ケーキ」と「ババロア」以外の他の要素は、話者の頭の中のセットには含まれていないという解釈となる。しかし「か」は、列挙された要素の中のいずれか1つが、ある事柄に該当するというを示すものである。すなわち、(42a)の「チーズケーキ」と「ババロア」を並列している「か」は、この2者からさらにいずれかを選ぶという意味を表しており、「話者の選択したデザート」というセットに該当する要素を厳密に特定していない。

(42b)は(42a)よりはわずかに自然度が上がるように感じられるが、これも(39A)の質問に対する答えとしては、やや不自然であろう。この「チーズケーキ」と「ババロア」を並列している「に」は、先に挙げられた要素に、さらに後続の要素を追加する意味がある⁸。このとき、確かに「チーズケーキにババロア」にはそれ以外の「アップルパイ」や「プリン」が含まれているという解釈はしにくい。しかし、森田が「AにB」という並列表現は「両者を対比したり、両者の取り合せを問題としたり、また、主たるAにBを添えてセットとなることを表す。」(p. 282)と説明しているように、「に」はあくまで列挙要素同士の対比や取り合わせを問題とする並列表現である。(42b)の「チーズケーキにババロア」という並列表現も、最初にした「チーズケーキ」に次いで「ババロア」を追加するという意味合いが強く、「話者が選択したデザート」は「チーズケーキ」と「ババロア」であると強く特定する意味はさほど感じられない。このように、「に」も、該当要素を厳密に特定して伝える意味を「と」ほどは持たない⁹。

以上をまとめると、「と」には話者の頭の中において命題に該当する要素を厳密に特定して示す意味があり、この意味は「と」以外の名詞を並列する助詞には見られないことから、この要素の特定という機能は「と」に特徴的なものであるといえる。

さらにこの要素の特定という「と」の機能は、中俣が「と」の意味の説明に用いている「隣接性」という概念とも関わりがあるように思われる。中俣は隣接性という概念について、「要素が同じ場面に存在すると

いうことである。」(p. 45)と説明している。その上で、「と」は名詞を並列する助詞の中で唯一、意味的には共通点のない要素同士を、同一場面に同時に存在しているという隣接性を動機として並列することが可能であるとしている (p. 28, pp. 45-48)。

(43)机の上りんごとみかんがある。

(中俣 2015:46)

(43)の例文で用いられている「と」は、「同一場面にりんごとみかんの2つがある、ということが使用の動機になっている」(p. 46)ということである。このように中俣は「と」の意味機能について、同一場面に同時に存在する要素同士を並列するものであるとしている。

ここで考えたいのは、「と」が同一場面にある複数の要素を文中に列挙するとき、列挙された要素が同時に存在しているその場面には、現実的にはそれらの列挙要素以外にも、話者がとりあげなかった要素が存在しているのではないかということである。

中俣は(43)の例文について、背景となる場面を特に提示していないが、例えば次の(44)のような場面が考えられる。

(44)午後出社すると、机の上りんごとみかんがあった。同僚にたずねると、朝、事務所に届いたお歳暮をみんなで分けて、私の分を机の上に置いておいてくれたらしい。

(中俣 2015:46 例(14)をもとに作例)

(44)の場面では、「りんご」と「みかん」が「りんごとみかん」のように「と」で列挙されているが、これらが存在する「机の上」には、「りんご」と「みかん」のほかにも、現実的にはデスクライトやパソコンが置いてあるかもしれないし、仕事の書類などが積んであるかもしれない。しかし、仮にそのように他の要素が色々あっても、(44)のように「机の上りんごとみかんがあった。」としても何ら問題がない。聞き

手（読み手）はこの文から、例えば、普段この机の上には「りんご」と「みかん」は置かれていないなどの何らかの理由で、話者は特にこれらに目をとめ、「りんごとみかんがあった。」として取り上げたのだろうと想像する。このとき「と」は、現実的には様々な要素が「机の上」に存在していたとしても、発話時点で話者が頭においているのは、「りんご」と「みかん」であると特定して文中に示すはたらきをしているのである。

ある要素同士が、同一場面に存在するということを契機に並列され、文中に提示されるとき、当然のことではあるが、それらの要素はその場面に同時に存在する様々な要素の中から、話者によって特に指定され、とりあげられているものである。「と」が、このように同一場面に存在するということを契機として複数要素を文中に列挙可能であることから、「と」には、様々な要素の中から、話者が頭においているあるセットのメンバーに該当する要素を厳密に特定して示す機能があるといえる。

以上をまとめると、「と」には、同一場面に存在する様々な要素の中から、話者が発話時点において頭においている、あるセットのメンバーに該当する要素を、厳密に特定して文中に示す意味機能があるといえる。そして、この要素の特定という意味が、従来の先行研究では「全部列挙」として説明されてきたのである。

また、この「と」によって並列可能な疑問語にも、指示内容を特定しようとする意味や、特定された対象を指示する意味がある。他の「並列助詞」とは異なり、「と」が疑問語を並列することが可能なのは、この「と」の該当要素を特定して示す意味と、「と」によって並列される疑問語が持つ、不定の部分に該当する要素を特定しようとする意味や、特定された要素を指示する意味とが、なじむためであろう。

6. おわりに

本稿では、「と」が疑問語を並列するという現象に

注目して、「と」の意味について考察を行なった。寺村の「と」の「全部列挙」という意味は、「挙げられた要素のほかに該当する要素がない」という暗示的な意味がクローズアップされ、寺村が本来意味した、「ある発話にあたって話者が頭の中においている、あるセットに属するメンバーをすべて列挙する」という意味があまり注目されてこなかったといえる。そのために、「全部列挙」というのは語用論的な推意なのではないかという、現実的な他の要素の有無を基準とした議論が生じていた。

しかし「と」は、疑問文中で疑問語を並列する場合に、聞き手の頭の中にある該当要素をすべて列挙するように求める作用をもつ。このことから、この「と」の「全部列挙」というのは、列挙要素以外に他の要素がないことを示すことに意味の中心があるのではなく、頭の中においている該当要素すべてを列挙することに意味の中心があるといえる。

さらに本稿では、この「全部列挙」というのはすなわち、発話時点で話者が頭においている要素を厳密に特定して文中に列挙することであると指摘した。「と」がいわゆる「並列助詞」の中で唯一疑問語を並列できるのも、この「と」の該当要素を特定する意味と、「と」によって並列される疑問語の該当要素を特定しようとする意味や、特定された内容を指示する意味とが、互いになじむためであろう。

「並列助詞」という枠組みの中で考察されてきた「と」は、疑問語を並列可能である点や、隣接性を契機としている点などにおいて、「並列助詞」の中でも、異質なふるまいを見せるものである。また、今回は疑問語を並列する場合について考察を行ったが、「と」が不定語を並列する場合は、「何かと何かを混ぜ合わせる」「誰かと誰かが争う」のように、述語が「混ぜる」「争う」「繋がる」「組み合わせる」「比べる」などの、向かい合う動作の相手を「ト格」で表すものが多くなるようである。このことは、いわゆる「並列助詞」の「と」と格助詞の「と」の接点を示唆するようにも思われる¹⁰。この点については、今後の課題としたい。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館書店.
 尾上圭介 (1983) 「不定語の語性と用法」 渡辺実編 『副用語の研究』 pp. 404-431, 明治書院.
 近藤研至 (2010) 「「並列助詞」トと「格助詞」トについて」 『上越教育大学国語研究』 24, pp. 80-68, 上越教育大学国語教育学会.
 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版.
 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系』 ひつじ書房.
 日本語記述文法研究会編 (2009a) 『現代日本語文法 2』 くろしお出版.
 日本語記述文法研究会編 (2009b) 『現代日本語文法 5』 くろしお出版.
 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』 研究社.
 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 一改訂版』 くろしお出版.
 森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』 東京堂出版.
 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』 明治書院.

コーパス

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 国立国語研究所 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

Web サイト

『青空文庫』 <https://www.aozora.gr.jp/>

注

- 1 用例中の下線は引用者による。(3) 以降も同様。
- 2 用例の収集にあたっては、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>) および「青空文庫」(<https://www.aozora.gr.jp/>) を利用した。用例に付した引用元情報に「BCCWJ」の記載のあるものは「BCCWJ」から引用した用例であり、それ以外の用例は「青空文庫」から引用したものである。
- 3 「か」については、提示された要素のうちいずれか1つが命題に該当するという選択的な意味を表す「並列助詞」である。そのため、疑問語に限らず、そもそも同一の要素を2つ以上並列する用法は不自然である。
? 太郎か太郎が来るはずだ。
- 4 尾上 (1983) は、「なに」「だれ」などの疑問語に「か」が付いた「なにか」「だれか」のようなものや、疑問語に「も」が付いた「なにも」「だれも」のような表現についても、疑問語の用法の一種であるとして、その意味特徴を記述している。本稿は助詞「と」が「なに」「どこ」「いつ」「だれ」「どれ」の5つの形式を並列することに着目して「と」の意味機能を考察するものであるため、このような「なにか」「なにも」のようなものについては一旦「なに」のような疑問語と区別することとする。ここでは「なに」「だれ」などの疑問語の用法についての尾上の記述を見ていき、「なにか」「なにも」などの用法についての記述は省略する。なお、このような「なにか」「なにも」などの表現については、寺村では「複合不定名詞」(p. 45)、益岡・田窪では「不定語」(p. 39) と呼ばれている。
- 5 日本語記述文法研究会編 (2009b) では、「特定」された指示対象というのは「談話に既出のもの、既出のものに関係があるもの、話の場にあるものなど、聞き手に指示対象が特定できると話し手が考えるもの」(p. 224) と説明されており、個別の個体を具体的に指定する意味合いが強い。したがって、初めて談話に導入される「知らない人」「たくさんの市民」のようなものは指示対象が特定されていないとされている。しかし本稿の「特定」というのはこれよりは弱く、単に「命題に該当する要素はこの名詞で表される物事である」と示すという意味である。
- 6 中俣は「と」の「列挙された要素以外に他の要素が存在しない」という意味を推意であるとした上で、この「他にはない」という推意を「排他的推意」と名付け、各「並列助詞」がこのような「排他的推意」を持つか否かを議論している。中俣が「排他的推意あり」としている「並列助詞」は、「と」「,」「か」「に」

- の4つであり、「排他的推意なし」としている「並列助詞」は「や」「も」「とか」「やら」「だの」「だか」「なり」の7つである。
- 7 中俣は「と」「か」「に」のほかに「、」(コンマ)も「排他的推意あり」の「並列助詞」として扱っているが、森田(2007)、日本語記述文法研究会編(2009a)では、「、」は「並立助詞」または「並列助詞」として挙げられていない。本稿でも「、」は助詞には含まれないと考え、考察対象から除外した。
 - 8 益岡・田窪(1992)は「に」を「累加」の並列表現としており、「該当する要素を、次々と数え上げていくときに使う並列表現である。」と記述している(p. 162)。日本語記述文法研究会編(2009a)も「に」を「累加列挙型」の「並列助詞」に分類しており、その意味を「同じグループに属する要素を次々に列挙していく。思いつく要素を次々に挙げていくという意味なので、ほかに同種の要素があるという含意は出てきにくい。」と説明している(p. 120)。
 - 9 日本語記述文法研究会編(2009a)は「に」について、「お弁当にビール、アイスクリームはいかがですか?」のように、「決まり文句で用いられることが多く、日常的に用いられることは少ない。」としている(p. 120)。森田(2007)で挙げられている例文も、「梅に鶯、松に鶴」や「破鍋に綴蓋」、「弱り目に祟り目」のような慣用句に限られている(p. 282)。そのため、そもそも(42b)のような文では「に」は用いられにくいと思われ、(42b)の例文の不自然さには、このような「に」の出現環境の制限という要因も関わっていると考えられる。
 - 10 いわゆる「並列助詞」の「と」と格助詞の「と」については、近藤(2010)がいずれも「NPト」として共通の構造を持つものであると指摘している。